

「日中映画交流の可能性」

プログラム

日時： 2018年11月24日（土）午後2時～5時

会場： 人民大学逸夫会堂第二报告厅

北京市海淀区中关村大街59号中国人民大學校内（明志路）

<http://map.baidu.com/detail?qt=ninf&uid=08f1f1f5a29939ca88db7344&detail=education>

主催： 渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA）

共催： 中国人民大學文學院、清華東亞文化講座

助成： 国際交流基金北京日本文化センター

■開催経緯

公益財団法人渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA）は、2014年から毎年、清華東亞文化講座のご協力をいただき、北京をはじめとする中国在住の日本文学や文化の研究者を対象としてSGRAチャイナフォーラムを開催しています。本年も、これまでの成果を踏まえながら、「東アジアにおける広域文化史」の可能性を探ります。日中同時通訳付き。

■フォーラムの趣旨

日中友好の基礎は民間交流に在り、お互いをより幅広く、正しく知るためには、相手の「心象風景」を知ることが、民間交流の基礎を固める上で重要である。映画は、その大事な手段であり、この40年にわたり、大きな役割を果たしてきた。

1977年と78年に、日本と中国でそれぞれ最初の映画祭が開かれた。中国では日本映画ブームが起り、日本でも中国への関心から多くの観客が訪れた。このときの高倉健の影響力は衰えることなく、2014年の同氏の逝去に際し外交部スポークスマンが追悼の発言を行ったことは知られている。

日本映画の上映は、その後の「Love Letter」や「おくりびと」、「君の名は。」にいたるまで、中国に日本人の細やかな感情を伝え、等身大の日本人に親しみを感じさせてきた。そして、日本にロケした中国映画は、北海道ブームをもたらすなど、現在の日本旅行ブームの原動力にもなっている。また、中国映画の上映は、「芙蓉鎮」や「さらばわが愛、霸王別姫」が波乱の現代史に生きる中国人の姿を伝え、「ヒーロー」や「レッドクリフ」が歴史スペクタクルの楽しさを教えてくれた。

日中の国同士の関係に摩擦が生じたときも、映画交流はさらに発展を続け、映画祭の開催や劇場公開、合作映画の制作やインディペンデント映画の紹介、さらには回顧展の開催など、多様化が見られ、お互いに影響を与え合ってきた。近年はSNSによる発信など、中国の若者の日本への関心が増加しているが、日本でも賈樟珂や婁燁の作品が上映され、今年は「空海——美しき王妃の謎」がヒットし、「中国電影2018」で最新作が紹介されるなど、新たな動きが起こっている。4月の合作映画の撮影に関する日中政府間協議の締結も、重要な一歩である。

いまや中国は世界第一位のスクリーン数と第二の映画製作本数を誇る映画の一大市場であり、日本も世界第四位の映画製作本数を維持している。世界の映画産業のひとつの中心は、まさに東アジアにあると言ってもよいだろう。本フォーラムでは、この映画大国である日本と中国の40年にわたる映画交流を、日本と中国の側からそれぞれ総括を行い、意見交換を行い、今後の展望を検討することを目的としている。

刈間文俊は、1977年の中国映画祭から字幕翻訳に携わり、これまで100本に近い中国映画の字幕を翻訳し、中国映画回顧展のプロデュースを行うなど、日本での中国映画の紹介に携わってきた。王衆一は、日本映画に精通し、「人民中国」編集長として多くの日本の映画人と交友を持ち、「日本映画の110年」を翻訳し北京で出版している。日中の映画交流の歩みを現場で知る二人の発表をもとに、日中双方の識者による討論を行う。

■プログラム

総合司会：孫 郁（中国人民大学文学院）

【講演1】刈間文俊（東京大学名誉教授）

【講演2】王衆一（人民中国編集長）

【総合討論】

討論者：李道新（北京大学）、秦 嵐（中国社会科学院）、周 関（北京語言大学）

陳 言（北京市社会科学院）、林少陽（東京大学）

司会者：顔淑蘭（中国社会科学院）

○同時通訳（日本語⇄中国語）：文 俊（北京語言大学）、宋 剛（北京外国語大学）

■発表内容

【講演1】刈間文俊「中国映画は日本になにをもたらしたか——その過去・現在・未来」

[要旨] 1977年に始まる中国映画祭は、日本に中国映画を紹介する大きな役割を果たした。1986年の「黄色い大地」のロードショー公開は、ニューウェーブの衝撃をもたらし、1985年の中国映画回顧展は、中国映画史の豊かさを教えるものとなった。1990年代に入ると、中国映画は国際映画祭での受賞が相次ぎ、インディペンデントの映画製作も始まるなど、多様化が見られた。日本における中国映画は、中国を知るための窓から、陳凱歌や張藝謀、賈樟珂、婁燁という監督の名前で語られる芸術となり、さらに歴史スペクタクルを描くエンターテインメントとなったが、いま中国で大ヒットしている「私は薬神ではない」は、新たな社会派エンターテインメントの可能性を示すもので、日本でも驚きをもって受け入れられるだろう。

[略歴]

東京大学名誉教授、武蔵野大学講師、南京大学客員教授。NPO 法人日中伝統芸術交流促進会副理事長。1952年生まれ。東京都出身。麻布高校卒、1977年東大文学部中国文学科卒、83年同大学院博士課程中退。駒澤大学講師、87年東大教養学部講師、助教授を経て96年教授。専門は中国現代文学、中国映画史。共著書に「上海キネマポート—甦る中国映画」（凱風社）1985年、「チャイナアート」（NTT出版）1999年、訳書に陳凱歌「私の紅衛兵時代—ある映画監督の青春」（講談社）1990年。これまで中国映画の字幕を百本近く翻訳してきた。『空海—美しき王妃の謎』も日本語版の監修・翻訳を担当。

【講演2】王衆一「今に問われる日本映画が中国に与えた影響——融合・参考・合作」

[要旨] 西洋から来た映画は日本経由で中国に伝わったのである。戦後日本映画はいくつかの段階で、それぞれ特色のある形で中国に入りましたが、決定的に中国で日本映画の存在を示したのは40年前『中日友好条約』が調印された時点からです。高倉健、栗原小巻、中野良子、倍賞千恵子などは幾世代の中国人の記憶に残っていて、国民間の好感度向上に一役を買っています。以来、日本映画は中国映画に与える影響はハリウッドとヨーロッパ、ロシア映画と違う形で今日まで続いています。中日友好や共同市場をめざす合作映画も中日映画交流の特徴のひとつです。昨年中国でヒットした『君の名は。』やこの夏中国で話題を呼ぶ『万引き家族』は、日本映画の新たなブームが始まったことを宣言すると同時に、同時代の日本人の「心象風景」は、映画を通して中国の若い世代に理解されることにつながるでしょう。政府間の映画合作協定の締結は、将来共同市場の形成に新たな可能性を与えています。

[略歴]

『人民中国』雑誌社総編集長。1963年生まれ。吉林大学で日本語学を専攻、1989年に修士号取得。同年、人民中国に入社。1994年から東京大学で一年客員研究員。コミュニケーションや、翻訳学、大衆文化など多岐にわたる研究を行う。中華日本学会及び中日関係史学会常務理事、中日友好協会理事を務める。著書に『日本韓国国家のイメージ作り』、訳書に『日本映画のラディカルな意志（四方田犬彦著）』『日本映画史110年（四方田犬彦著）』などがある。第十三期全国政治協商会議委員。